

信頼感とソーシャル・キャピタル、寛容性

駒澤大学 片岡えみ

1. 分析課題と要約

一般的な他者への信頼感（一般的信頼：ほとんどの人は信頼できる、or 世の中信頼できる人間の方が多い）は、実際の身近な他者や具体的な社会システムへの信頼とどのような関連性を持つのだろうか。またどのようなソーシャル・キャピタルや価値観が一般的信頼を高めるのか。本研究発表では、

(1) 地域圏と教育圏の具体的な社会圏を設定して信頼感を多面的に測定し、一般的信頼との関連性を明らかにする。(2) 地域と教育への信頼感の指標と近隣ネットワークなどのソーシャル・キャピタルの有無が、一般的信頼とどのような関連性と規定構造をもっているかを明らかにする。(3) また一般的信頼が、寛容性の価値によって規定されていることを明らかにする。(4) 一般的他者への信頼感とは別の指標で測定した「一般的他者への不信感」は学歴とリニアではなく、一般的信頼とは別の次元として考える必要性があるのではないか。(5) 信頼を個人的信頼とシステム信頼に分け、一般的信頼との関連を検討する。(6) 信頼感の構造について検討する。

表1 信頼と社会圏の関係

		1 個人に対する信頼	2 システム信頼
社会圏	A 教育圏	A1 子どもの教師（先生）への信頼	A2 学校制度への信頼
	B 地域共同体	B1 近隣住民への信頼	B2 地域行政への信頼

2. データ 母集団は関東圏1都7県（山梨含む）の3歳～中学3年生の子どもをもつ親で、3000世帯を抽出し郵送法で質問紙調査を実施した（2006年11月～12月）。有効票は2283票（父親1016、母親1266、不明1）で1321世帯からの有効回答、回収率は44.03%（世帯）。

3. 地域共同体（近隣住民と地域行政）への信頼・不信とソーシャル・キャピタル

(1) 地域近隣ネットワーク・キャピタル×地域共同体への信頼と不信

近隣住民との相互作用（近所の人たちと立ち話、食事など）が多いのは、社会的地位よりも性別で大きな差異がある。母親>父親、学歴による差異は小さいが中卒学歴の親の近隣つきあいは低調。

(2) 地域近隣ネットワーク×B1 近隣住民への信頼度（近所の人困ったときや助けを求めたときに行動してくれると思う） 近隣ネットワークが密であると「そう思う」が約8割、ない場合は約2割となる。学歴よりも実際の近所つきあいの有無が、近隣住民への信頼度に影響している。

(3) B2 地域行政へのシステム信頼 2割前後の人々が地域行政を信頼（地域で問題が起こったとき、行政は対応）するが、社会的地位との関連性はない。

4. 教育への個人的信頼とシステム信頼 結果は略（発表当日の資料を参照）

5. 一般的信頼感の規定要因と主な結果

(1) 社会的地位変数セット（SES）による一般的信頼の説明力は低い。学歴は効果大。

(2) 近隣住民とのつきあい頻度（B1）が高いほど一般的信頼感が高く一般的他者への信頼感実際の近隣住民との社交を反映している、又は近隣ソーシャル・キャピタルを通じて醸成される。

(3) 子の教師への信頼（A1）が高いと一般的信頼感が高く、教育システム信頼（A2）は無効果。

(4) 地域行政への信頼（B2）が高いほど、一般的信頼も高い。

(5) 異質な他者への寛容性が高い人ほど、一般的信頼感は高くなる。

(6) 権威主義的価値観の高低は、一般的信頼とは関連をもたない。

(7) 他者への不信感は学歴とは関連を持たなかった。他者不信は一般的信頼感とは別のメカニズム。

6. 信頼感の構造と議論 当日の別資料で報告

文献

片岡えみ 2014, 「信頼感とソーシャル・キャピタル、寛容性」, 駒澤大学文学部研究紀要, 72号, 137-158.